

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2012年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科			異文化コミュニケーション 専攻			
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士後期課程3年		平塚 ゆかり 印				
指導教員	所属・職名		氏名				
	異文化コミュニケーション研究科 教授		鳥飼 玖美子 印				
自然・人文・社会の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
研究課題名	日中通訳者の通訳規範意識とその形成要因						
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士後期課程3年		平塚 ゆかり				
研究期間	2012年度						
研究経費	200 千円（実績額又は執行額）						

研究の概要（200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。）

本研究は日本語－中国語通訳者を調査協力者とし、通訳者の規範意識をオーラルヒストリー・インタビューという研究方法を用いて分析・考察することを目的に、現代中国における通訳・翻訳の規範が如何に生まれ、進展してきたのかを考察するものである。本研究では、中国古代の仏典翻訳論、近代の嚴復、林語堂の「信達雅」「忠実、通順、美」論、姜椿芳と李越然の通訳規範論等を歴史的に概観し、実践通訳者の規範と中国の通訳翻訳論との関連性を探るとともに、通訳者・翻訳者の規範と社会との関係、そして規範の形成要因を明らかにすることを試みた。本研究のデータ分析結果から導き出された通訳者の規範意識を、Toury、Chestermanの規範論、林語堂、李越然の中国翻訳通訳論を援用し考察した。

キーワード（研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。）

〔日中通訳者〕 〔通訳規範〕 〔オーラルヒストリー〕

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

まず、本研究により中国北京の国家図書館に赴き文献調査を行なったことで、日本では原文入手が困難であった中国通訳翻訳学術誌『中国翻訳』の前身である『翻译通讯』から、通訳規範論考である姜椿芳や李越然などの論考を入手することができ、本研究の目的、すなわち「中国というコンテクストにおける通訳翻訳規範を歴史的流れに沿って概観する」の達成に大いに役立った。その他、本研究の課題としていた点、すなわち中国の通訳翻訳規範と現代における通訳・翻訳規範との関係性、現代日中通訳者の実際の通訳現場での規範意識とその規範形成要因についての分析・考察結果を後述する 2 度の研究発表と 1 篇の投稿論文にまとめ、成果として報告した。また本研究成果は研究代表者の博士予備論文の核となる章にも集約された。ここでは本研究の文献調査を通して新たに執筆した箇所、日中通訳者のインタビューの分析結果及び考察を記す。

1. 姜椿芳の「通訳者の心得」

姜椿芳(1912-1987)は、ロシア語の翻訳者として知られ、上海外国語大学を創設した創業者である。「翻訳の善し悪しは政治問題に直結する」と主張した姜は、1953年に《略談口译问题》において「通訳者の心得」について論じた。具体的な論考は以下の通りである：1. 事前準備をしっかりと行う。2. 話し手と事前に打ち合わせをしておく。3. 話し手の論理的ではない混乱したスピーチも整理して段落毎にわけて論理的に訳す。4. 通訳は編集も兼ねる。5. 要点をおさえて数字などは漏らさない(メモを取る)。6. 第一人称で訳し、話し手の語気、精神、感情、表情、姿勢なども極力まねて訳す。姜は通訳翻訳における一般的な問題点として、翻訳に比べて通訳が軽んじられている現状を挙げ、通訳の重要性を指摘。そして、通訳の基準は翻訳と同じく「信達雅」であると述べ、中でも信、すなわち忠実を第一に考えるべきと主張、続いて達、そして最後に雅であると基準の重要性に順序をつけて論じた。

2. 李越然の「準、順、快」

李越然(1927-2003)は、1945年から1965年の20年間、ロシア語通訳者として中国とソ連の外交通訳に従事した通訳者である。北京第二外国語学院副校長、中国翻訳者協会副会長を歴任した。李越然は国務院所属の通訳者として、中ソ蜜月時代において毛沢東、周恩来、劉少奇など歴代国家要人の通訳を担当していたが、ソ連と中国の関係悪化により職務を外され、文化大革命により、ソ連のスパイ容疑をかけられ、1967年に逮捕、7年にもわたる牢獄生活を送るという体験を持つ。李は1983年に通訳研究に関する論文《建议开展口译工作的研究》を発表し、その中で「通訳行為は翻訳行為と異なり、音声を用いて情報を伝達すること、即時的に訳出しなければならない」という通訳の特徴をふまえ、翻訳規範に偏向して用いられてきた「信、達、雅」に代わる通訳規範として「準、順、快」を主張。「準、順、快」の含意は下記の通りである：準—話し手の発言の真意をとらえ、的確(≠正確)に訳す。順—自然なわかりやすい表現で聞き手に伝える。快—敏捷に反応し即座に訳出し、話し手の発話のスピードに合わせた訳出を行う。李は自身の通訳規範を用いて多くの後世を育てた。李の論考自体は4000文字に満たない短いものであるが、中国における通訳教育現場では、今も「信達雅」と並んで、原則として用いられている。

3. 齊宗華の翻訳論

齊宗華(1929-)は英国に生まれ、幼少期をフランスで過ごした後に中国へ帰国した女性のフランス語・英語通訳者である。中国外交部の通訳者として1952年から約二十年間、周恩来、毛沢東の国家要人や郭沫若など文化人のフランス語・英語の通訳を務めた。後に北京国際関係学院教授に就任した。1983年に発表した論文《略论口译》において齊はこれまで「信達雅」が通訳原則としてもとらえられてきたが、音声を用いる口頭通訳においては「信達雅」のうち、「信」と「達」が最も大事であると主張し、通訳行為のプロセス、すなわちメッセージの聞き取り、メッセージの理解、そしてメッセージを別言語で表現するという三段階のプロセスにおいて、「理解」が最も大事なプロセスであると主張。そして、通訳者の理解力は必須の能力であると主張するとともに、メッセージに含有する実質的な神髄である情報伝えるために、通訳者は取捨選択をする高い判断能力も必須であると論じた。表現というプロセスに到っては、通訳者がスピーカーの手振りや表情を真似することまでは不可能でも、語調や感情、

研究成果の概要 つづき

語気、声量の大きさや話の速度などはできるだけスピーカーに合わせる事が大事で、そうして初めてスピーカーのメッセージの精神を聞き手に伝達できたと言える、と論じた。論考は、上述した姜の『通訳者の心得』との共通点が見いだせるが、姜の主張に比べると通訳者の主体性を発揮する幅をより狭くしていることが読み取れる。

以上三者の論考は①厳復の「信達雅」が論の出発点となっている②即時性や、通訳者の音声を通して聞き手にメッセージを伝えるという通訳行為の特徴を前面に打ち出し、通訳行為への理解を促す論調となっている③実践の重要性を提起している、という共通点がある。これらは次世代の通訳者、或いは通訳者を目指す者への規範提示の意味で書かれているが、それと同時に三者のこれまでの通訳者人生の一端が垣間見える論考である。

本研究では中国語母語話者 6 名、日本語母語話者 3 名の日中通訳者 9 名を研究協力者として、9 名のオーラルヒストリー・インタビュー・データから各通訳者の規範意識を分析し、中国語母語話者と日本語母語話者というカテゴリーに二分類し、母語の違いや訓練経験の有無、そして背景の相違などの関連性について検証を試みた。また、現代通訳者の通訳規範と歴史的に規範とされてきた通訳翻訳論との関係性をインタビュー・データから探ることを試みた。以下インタビューの分析結果と考察を述べる。

まず、中国語母語話者の規範意識には、先述した姜椿芳の「通訳者の心得」、そして李越然の通訳規範「準、順、快」など、3 章で概観した通訳規範や、「原文を越える」というイデオロギーを含有した通訳姿勢を打ち出した姜や許の通訳翻訳論が垣間見える結果となった。通訳者の母語、中国語の背景にある歴史的言語観は、すでに通訳者の意識に内在化しており、規範として成立していることをうかがわせる結果となった。

Chesterman の規範論から考察すると、調査協力者である通訳者は、各人ともに毎回異なるクライアントの期待規範を十分に理解し、且つその期待規範に則った自身の果たすべき役割を理解した上で、異なる現場において職業規範に則り、訳出を行なっていると見ることができる。通訳者はその役割を果たすために、「内在化された期待規範」に基づき、職業規範の下位概念である責任規範、コミュニケーション規範、関係規範により訳出の内容を決定し、通訳行為に臨んでいることが示された。

通訳者のインタビュー・データの分析を通し、本研究では以下の点が明示された。

①通訳者によって「忠実」の含有する意味を、「目標言語の文化的事象を含めた内容に忠実」「字面だけでの直訳の意での忠実」と二通りにとらえており、前者は「忠実」を規範であると語っているが、後者は「忠実」は規範ではないととらえている、②通訳者は、「関係者間のコミュニケーションを最大化する」という Chesterman の「コミュニケーション規範」は、いずれも現場での実務を通して持ち合わせている、そして中国語母語話者の通訳行為に現れた規範意識の源は、中国の通訳規範に依拠していることがうかがえる、③通訳者は、主に通訳業務を通して蓄積された経験則などから、期待規範が内在化され、新規の通訳業務においても瞬時に外的な期待規範を汲み取り、主体的に通訳に臨んでいる、の 3 点である。これらの分析結果から、関係者と通訳者の(物理的ではない意味での)距離、すなわち通訳現場における、通訳を必要とする聞き手や依頼主の期待規範と、通訳者が抱く期待規範との乖離が、通訳パフォーマンスの完成度に影響を与える可能性が示唆された。林語堂の翻訳論に依拠するならば「忠実、通順、美」の「忠実」「通順」は、両立してこそ本来の「翻訳・通訳」としての意味を持つ、とみることができ、協力者である通訳者は母語にかかわらず、「忠実」「通順」の両立を規範として備えている傾向にあることが明らかとなった。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 論文

平塚ゆかり、「オーラルヒストリー・インタビューから見る通訳者の規範形成」『通訳翻訳研究』第12号、2012年、69-82頁

④ 学会発表

1. “Foreignization/Domestication of Translation and their Backgrounds in China : The Case of Literature Translation” Foreignization Strategy Peculiar to the Japanese Social Context 2012 IATIS Conference (International Association for Translation and Intercultural Studies)、2012年7月26日、Queen’s University Belfast. UK (共同発表者：斉藤美野，山田優，河原清志，坪井睦子)

2. 「日中通訳者の規範意識とその形成要因」日本通訳翻訳学会第13回年次大会
日本通訳翻訳学会 (於：京都橘大学) 2012年9月8日